

## 夫龍伊松禪師傳考

——白隱の法嗣筆頭第一の人——

……白隱法系の是正必要……

陸川堆雲

夫龍伊松かいろりゆういしやうなどと云つても耳新らしく、初めて知る人も多いかと思ふ。而かも此の人は、白隱和尚法嗣筆頭第一の人である。然るに此の人は世上一般の人に殆ど知られずに居るのは兎も角として、白隱下と稱する現今臨濟禪界の人々が知らずに居ることは、如何にも不思議のことである。かく云ふ私も嘗ては此の一人であつたのだ。

最近禪ブームなどと云はれて居るが、其の内容については響聲に堪へぬものがある。禪は古來より佛心宗と云はれ最も正しく釋尊の思想を傳ふ可き宗旨であるに拘らず、現今の禪には歪曲思想が横行して居るのである。私は微力ながら其是正を念願して是が論稿を作らんと思索を重ねているのであるが、其原因探究の爲め、白隱和尚の研究に着手したのである。然るに驚いたことには、不

可解のことが續出するのである。白隱について何故に斯くも種々のことが忽諸に附せられて居たのかと了解に苦しむ次第である。此の夫龍和尚のことも其の一つである。私がこゝに書く夫龍和尚の傳記考なるものは満足すべきものではないけれども、埋もれ居る古人を顯揚し、併せて白隱和尚傳を補足し以て歪曲せる禪宗思想是正の一端に資せんとするものである。

一般に行はれている白隱和尚の法嗣圖を見ると、遂翁、東嶺に始まり大休以下數十人が並らべ記されている。此の法嗣圖は何を根據として斯くの如く羅列したものであるのか、妙心寺大本山の宗脈圖は見たことはないが、妙心寺史を見ると矢張り此の様であるから、恐らくは同様に記されているかも知れない。今日の臨濟宗の人々は、

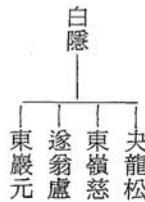
皆な白隠下の法脈下に統括されており、悉く白隠下の兒孫なりと云はれているが、臨濟宗に於ては以心傳心とか、一器の水を一器に移すが如くとか、特に傳法を尙び法脈を喧かましく云ふのである。然るに往古のことは兎も角として、近世白隠和尚直下に、斯かる法脈問題に於て納得の行かないことのあるのは、如何なるものであろうか。茲に夫龍和尚のことを提示して、此の問題に觸れて見たいと思ふのである。

先づ白隠和尚研究に着手する場合、其の直接資料となるものは其の著作である。是等は白隠和尚全集に其の殆どが収録されており、其他に於ては遺墨、手紙類と門下の人々の文獻があるが、其の傳記の根本資料となつて居るものは、東嶺和尚撰述の獨妙禪師年譜（以下白隠年譜と略稱する）である。此の年譜については別に研究を要することもあるが一應文政三年に刊行された龍澤寺藏版のものによることになつて居る。

此の年譜によると白隠和尚の法嗣は、夫龍松、東嶺慈、遂翁廬、東巖元の四名となつており、其他の人々は單に師の爐轡に出でたるものとして一括に記され特定の個人名は記されて居ないのである。然れば白隠和尚の的々相承たる正規の法嗣者は、此の四名以外にないのである。

而して其の傳法順序も記載の順序であることは、年譜其

他を精査すれば略ぼ明らかである。それであるのに、現今流傳の宗脈圖には、東嶺と遂翁二人はあれど夫龍松も東巖元も見ることなく、而かも是に對し何等の疑問を抱く論議の如きものを、寡見にして知るところがない。まことに不可解と云ふべきである。今嗣法表を記せば次の通りでなければならぬ。



右は東嶺撰述の年譜を基礎としたものであるから若し是を否定するならば、年譜を否定することになる。さすれば其年譜は無權威となり、白隠傳の根柢が崩れることになる。東嶺は白隠歿後二十四年間生存しており（遂翁は二十一年間生存）白隠化導の發展を劃して居たのであるから、其年譜につき訂正加除すべきものありとせば、無論それを改訂したものであることは云ふ迄もないことであつて、特別にも大切なる嗣法者の點に於て最も然りと云ふべきである。當時東嶺の此の點に關し批難や異議ありとすれば、これが其儘になつて居たとは考へられぬことである。何となれば此の年譜は、東嶺の撰述とはなつて居るとは云へ東嶺の專斷によりて決定したもので

なく、必ず遂翁とも協議され門下一同の公認となつて居たものと考へられるものである。故に東嶺生存中は、白隠の法嗣としては、四名に限られていたものである。即ち東嶺の目の玉の黒い中は是を動かすことはなかつたのである。是の故に白隠法嗣者が其後附加したものであることは東嶺死後なることは明らかである。而して其附加がよい加減であつたが爲めに却て重要な二名が、何時の間にか逸脱してしまつたものであろう。今日でこそ白隠々々と云ふが、白隠歿後に遂翁、東嶺順世したあと白隠の勢望も若干だれ氣味で、下た火となつたものと見ゆる。其證據には白隠門下以後の傳記さへも記し傳へるものなく、其の行蹟も多くは不明となりつゝあつた。白隠歿後六十餘年を経た文政十二年に妙喜和尚が、是を遺憾のこととして、其の遺聞を掇拾して荊棘叢談なる一書を著して、漸く其れ等の片鱗を記し留めた。夫れが爲めに今日それが傳はり得たのを以てしても其消息が知らるるのである。

其後相國寺の荻野獨園師が明治時代になつて近世禪林僧實傳三卷を著して至道無難以下の僧傳を書いたが、白隠下に關するのは妙喜和尚の荊棘叢談を其儘轉記したのみで何等の研究も補足もなかつたのである。昭和に入つて同寺小畠文鼎師が續近世禪林僧實傳六卷を著はし白

隠以後の臨濟僧傳を明らかにした。同師は實に篤學であつて從來の禪僧傳の不備を慨し、非常の努力をして此の著を完成したのであるが、それを以てしても猶其の傳記の資料得難くして其傳を作り得ざるものがあり、是を卷末に一括して未詳者一覽表を附した。此の未詳者の中に前記の夫龍と東嶺の二人が含まれているのである。私は小畠文鼎師とは面識と文交があり、其僧傳編纂につき若干の資料を提供して、非常に喜ばれたこともあつて同師の眞摯なる一面を知つていたのであるが、當時私は白隠研究について今日丈けの知識なく、遂に此の商量に及び得なかつたことは残念である。

夫龍の夫は、快と同義である爲め快龍と書く場合もある。字名は(伊松、惠松と云)。元來は白隠の道友にて稍稍先輩であつた様であるが、其力量の及ばざるを知りて、自ら下つて法弟の位置につき、後には嗣法者となつたようである。白隠年譜。實永三年(白隠二十三歳)の條を見ると次のように書かれている。

夏法弟松藏司、行脚して濃州に至ると聞き、乃ち松を倡つて俱に豫州正宗寺に至り、逸禪和尚の佛祖三經を講ずるを聞く。

とあるが、この松藏司とあるのが夫龍伊松その人である。これによれば白隠と夫龍とは深かき相識關係であつたの

で、白隱が夫龍を誘引して伊豫松山の正宗寺へ行くのである。白隱は此の寺で四十二章經を讀んで發憤するところが同條下に記されている。而して前記の「行脚して澧州に至ると聞き」とあるのは、美濃大垣在の檜村（現在は大垣市へ編入）なる馬翁の瑞雲寺のようである。此の瑞雲寺馬翁の處へは其前年以來、白隱が掛搭した處である。壁生草にはこの處を次の様に書いてある。

翌年春（寶永三年）師弟惠松、後に源立快龍和尚予が迹を追ふて遙かに瑞雲に到る。草鞋一錢なき客僧。瑞雲は例の通りの大貧寺なり。留錫肩から相叶はず、せん方なく近隣の寺に願つて且らく掛錫せしむ。

とあるから馬翁を訪ねて來た夫龍を、白隱は近處の寺へ預けて馬翁に通參させたのである。これによりて知らるる様に、當時の行脚僧は殆ど無錢旅行に等しい雲水の修行振りであつた。

かくして夫龍の解決をつけた白隱自身は、若州小濱の常光寺に於ける萬里和尚の虛堂會に行つたのである。その地で伊豫松山の正宗寺は富裕の寺であり、托鉢も可能であることを聞き知つたので、又瑞雲寺へ歸り夫龍を伴つて松山の正宗寺へ行くのである。松山の正宗寺は富裕であるから、生活については問題は無いが、それとは別に師家の逸禪和尚も相當名の聞へた人であつたと見ゆ

る。壁生草には次の様に書いてある。

こゝに於て瑞雲に歸り、惠松を誘ふて松山の正宗の衆寮に到る。

是によりても知れる通り、白隱と夫龍との親さの様子がよく窺ひ知り得るのである。大觀和尚の白隱年譜補註、寶永三年の條に

松藏主、名は伊松、師の法兄なり。才及ばざるを以て謙りて弟と爲る。師（白隱）亦た愛顧他に過ぐ。後に本州蓼原源立寺に住し、快龍と號す。此の寺元と四宗兼備、泉涌派下に屬す。之に依て比奈無量寺を中興す。師（白隱）に請ふて開山と爲し、再び師の法を嗣ぐ、病革むるに臨み、位を妙心第一座に轉じ而して化す。

とあつて、後に源立寺、無量寺の關係に於て更に白隱と深かき交渉と關係を知ることが出来るのである。猶夫龍の字名は伊松であるが、壁生草は惠松となつてゐる。恐らくは駿河地方の發音に於てイがエになつて伊松を惠松と書くものかと思ふ。

白隱は夫龍伊松に對し「愛顧他に過ぐ」と大觀の言にある通りで、白隱は此の外にも常に伊松を伴つて各地を行脚したもののようである。白隱は伴を結んで、よく諸方を遍歴する流義のようであつたが、兩人は特別にも至極親密であり、是は終生變らなかつたようである。從て

源立寺の中興、無量寺創立などのことが行はれたものである。夫龍のことは源立寺中興以前の生活が如何なるものであつたか、資料の得べきものなく不明であるが此の間に必ず語るべき何かがあるであろうと遺憾に思ふ次第である。

私は昭和三十五年一月初めて源立寺及無量寺の所在及び是れが夫龍和尚の寺なることを知りて其調査にかゝり、又同年十月静岡市の白隠研究家なる秋山寛治と相知り、同氏の同行を得て其地方を踏査し、漸く左の要領を得た。

一、夫龍伊松が中興した源立寺は、現在は静岡縣富士市蓼原町にあり、玄立寺とも云つたらしい。山號は大富泉山と云ふが昔は白泉山とも云つたと聞く。今は古義眞言宗、泉涌派の寺である。而して小兒の瘡の虫薬の寺と云ふことで有名にて、其薬名は氣神丸と云つてゐる。開創は貞應二年（一二二二）である。開山は廣運和尚大律師。天正十八年（一五九〇）庚寅五月二十六日寂となつてゐる。

二、元來は眞言、天台、律、法相四宗兼學の特別の寺であつた。寺内には小田原城主北條氏政の首塚があり、富士市の史蹟指定となつており、又清水の次郎長の喧嘩相手の宮島俊藏の墓もあり、古來相當の由

緒のある寺の様で、裏の墓地には大きな老松が樹つてゐる。併し今の寺傳には白隠和尚のことも夫龍和尚のことも一切傳はつて居らず、吾等の話を聞いて初めてかゝる史實を知つたと、寺では驚いて居た。それは其後眞言宗の寺になつてしまつたので、自然禪宗關係の所傳は消へてしまつたこと、思ふ。併し其の過去帳にも、又寺域の墓地にも之を證する立派な石塔があるから間違はない。

三、過去帳によれば、夫龍和尚は第十世にて準中興となつて居る。墓碑は寫眞の通りであるが、それによると寂年は寛延元年（一七四八）戊辰十二月十七日、

源立寺夫龍和尚石塔正面



源立寺夫龍和尚石塔背面



世壽は不詳である。此年白隠は六十四歳、東嶺は二十八歳で未だ東嶺と云はず道果と云つて居り宗門無盡燈論を著はした年である。

四、此の寺の中興は第八世藍水和尙（寶永三年丙戌八月九日寂）（白隠二十二歳）。此の人は清水の長福寺及び禪叢寺に住した。第十一世は郊巖和尚で寶曆三年甲戌二月八日寂。世壽三十九。（白隠七十歳）。

源立寺は富士川の洪水の爲め幾度も災害を受けたので寺の古記録其他は流失したとのことで、以上の外何も知ることは出来なかつた。私の所藏する荊叢毒藥卷八の十八丁に、東嶺和尚と傳えられる左の書き入れがある。

藍水は密印和尚をして、泉涌兼傳の法を嗣がしめ、以て夫龍和尚に傳ふ。（密印は源立第九世。享保十五年（一七三〇）庚戌正月十九日寂。白隠四十六歳）。又寛保三年白隠五十九歳（東嶺初めて白隠に謁す）の時に書いた、侍者玄弼の息耕録開筵普說印解の序文中に次の様なことがある。

元文四年の冬、虛堂錄會を松蔭寺にて催す爲めに寺内の修理をすることとなつたので、其間白隠は、純、航（純は後の圓桂和尚、航は後の大休和尚）二子を携へて遁がれ、旬日餘を白水に淹留す。

と記されているが、白水とは白泉山源立寺のことである。是は夫龍和尚が迎へたものと見ゆる。此の時に於ても白隠と夫龍とは日夕親しんだものと想像さる。又延享三年（一七四六）丙寅、白隠年譜六十二歳の條に

源立の請に應じて一乘經を講ず展筵普說あり。と記されている。一乘經とは法華經のことである。これは夫龍が白隠を請じて行つたもので、其の普說の中には次の様な挿話が記されてあるから、是によつて推考すると法華經中の方便品を講ぜられたものらしい。それは荊叢毒藥卷二にあるから是を抜抄して見る。

惟れ時延享第三。丙寅春。白水山主（夫龍のこと）曠劫扶宗の願輪に鞭ち、無遮法會を設け、山野に命じて

諸佛出世の本懐を敷演せしむ、豈に小縁ならん哉。茲に一段難入底の秘訣有り。山野二十年前、燈下に譬喩品を読み見得徹す。一見白汗を流出する底の大義なり。久しく此の要を黙し連説を務めず。此の日眉毛を惜しまず運出して法施に充つ。三藏の行人は縦ひ見得著するも聲の如く啞の如くして驚走せん。通別の機は信受疑はずと雖も、分明に見得透すること能はず、特とり圓頓上乘の菩薩のみ有つて醍醐を呑むが如く、長者の寶聚求めざるに乍ち手に入らん。

寛保の初め一士人有り、江州彦根の武臣藤氏某甲なりと。兩金五百を裏んで、東の方武陵に使す。從者三五輩、路は尾濃の間を歷る。一夫有り從者に交つて且つ走り且つ行く。寄宿も亦た俱にす。其の謹慎周密なる態度は流輩に超ゆ。士亦た甚だ之を愛す。一日兩金五片を出して士人に告げて曰く、幸にして賢君の後塵に屬從して長途危険の恐怖を通る。吾は是れ濃陽の邊境の細民の子なり。家兄武陵に在て重病月を重ぬ。父母小奴をして之を迎へしむ。金は其の糧なり。願くは賢君の履袋の傍に加へて以て枕を安せん。蚤莫に武陵に到らば必ず是を賜へと。士微笑して革囊裡に納る。出づれば則ち之を掲げて出で、入れば則ち之を掲げて入り、乘れば乃ち言く、革囊好在なりや。下れば則ち言

ふ、革囊好在なりやと。一朝乍ち夫の所在を失す。革囊も亦た無し。諸卒皆な驚顛す。士特とり白若として飲噉し畢り、微笑して即ち發す。纔かに三四喉を歷て、一夫の東より來り短書札を呈して走過する者有り。士一見し了て微笑して即ち行く。行て驛亭に到れば囊子は挂着して亭の柱に在り。士即ち金壹封を出して囊を接し、微笑して又行く。從者皆な怪しむ。晚陰に到て囊を開けば裡面皆な石なり。諸卒羅拜して其の端由を問ふ。士乃ち懷を開いて一書札を出して之を示す。是れ彼の一夫の走り來て馬上に寄呈する底の短書なり。

其詞に曰く。草賊小鹽某甲死罪死罪。恐懼作禮。謹で賢君藤大人の鞍下に寄呈し奉る。伏して惟れば草賊鹽奴、貧窶の母の乳を舐めて頑愚の父の手に長となれり。母は貧窶にして常に糟糠に厭かず、厭かずと雖も終に寸絲も他物を犯かさず、父は頑愚にして一丁字を知らず、知らずと雖も常に貧潔に甘へて饑ゆ。鹽身財六尺に近かくして耳目萬夫に劣らずと雖も、賦性凶惡にして夷齊を拙とし、跣躡を廉なりとし、侯黑と親しみ交はり、侯白と友とし好し。父母の死生を知らざる者蓋し此に十年なり。倉庫の底を穿ち、廩庾の壁を截り、室の樞戸に穴あげ、人の牛馬を驅る。喉の受くる所、肩の懸くる所、皆な是れ他人の淚血なり。刀俎は鹽が

終を期し、鴉犬は鹽が肉を遅しとす。常に萬死の中に坐臥して僅かに一生を偷む。朝にして夕を待つ、一身を束ねて生けりと爲さざるもの久し矣。身に一滴の生血無く、心中一點の仁恕無し。人の屋を焼き人の子を殺して錢財を盜奪すと雖も、己が身を賑はずに到ては、半月の用を作さず。鹽が如きは寔に是れ泥犂の人なり。先きに大人が金に東都に使用するを窺て、肺腑を碎ひて此の鄙計を設く。何ぞ量らん遣つて賢君の奇計に罹らんとは焉。大凡そ人の財を取る者は、主若し西すれば賊は必ず東す。主若し東すれば賊は必ず西す。然るに今賢駕の東を指すを見て、奴も亦た東に走り、暗塚八九を過ぐる者は何ぞ哉。賊奴心に竊かに謂へらく、事若し成ることを得ば是れ可なり。若し成ることを得ずんば再び賢君の恩波に浴さんと。是れ鹽が大人を以て庸流に擬せざる所以なり。若し然らずんば、鹽豈に走て東することを爲さん哉。果して鹽が豫しめ知る所の如し。大凡そ鹽が經歷する所、奥羽の東、肥筑の西、土に農に、工に商に、鹽が邪計に預せざる者は半箇も亦た無し。特とり賢君のみ有て、還つて倒まに鹽を捉へて此の坑壘に推す。寔に膽冷へ股戰のく。恨むる所は草賊萬死の殘軀、頸を伸べて大人の足下に死せざることを焉。嗟あ、死せずして何をか待たん哉。是れ鹽

が大に慚愧する所の者なり。囊は次驛の亭柱に掛けて以て進反す。願くは向きに寄する所の小金を賜へ。是れ鹽が前日欺き得る所の人の涙血なり。豈に大人の仁徳の手脚を汚さん哉。歎み冀くは藤大人、眉壽は南極の老星に等しく、祿算は北辰の高輝を増さんことを。鹽頓首、死罪死罪。恐懼作禮して藤大人の鞍下に寄呈し奉ると。

鶴林半死の殘喘、大法鼓を打ち、大法座に登り、多少の叨叨を打す。那處か是れ難透底の秘處。道ふこと莫れ、鶴林老ひ去て禪を説くこと孔竅無しと。此は是れ山野、佛に代つて化を揚ぐる底の出世の本懷なり。若し人見得著せば、必ず靈山未散の會を見ん。所以に言ふ、前日風雨の裡、故人此より去ると。何を以てか驗と爲さん。經に曰く、謗斯經故獲罪如此。久立大衆伏して惟れば珍重。又一偈有り。葛藤窟裡の瞎老漢。葛藤を把著して難を避けず。八萬の人天蹉過了。蓮華經裡の虎狼鬪。

とあるので其の場の大要を知ることが出来る。更に荊叢毒藥卷之四に、羅睺阿修羅障障日月辯と云ふ一文がある。是は日蝕月蝕について同時、同所、同會に於て作つたものである。是を見ると此の時の法華經は序品から講ぜられた様にも解せる。それは兎も角、この辯の内容は、

科註法華經一の十紙にある注の中に、羅睺と日蝕のことが註されているのに對し白隱一流の辯辭を弄した長文のものであるが、今日の天文学から見ると時代離れのした日蝕論である。茲に詳記する價值はないから省略する。

以上の外夫龍の中間の事蹟については知るところはないが、後年になつて無量寺の創建が起り、夫龍と白隱に深い關係が生じて來るのである。この無量寺と云ふのは、現今静岡縣吉原市比奈にあつた寺で、惜しいかな現在は廢寺になつてゐる爲め、資料は殆ど散佚して仕舞つて居る。それ故少し残つて居るものを拾ひ集めて、若干の見聞を交へて書いて見る。

白隱年譜。寶曆二年壬申、白隱六十八歳の條に

春松蔭に在つて碧岩錄の遺講を評唱す、四衆滿堂。四月八日新無量寺落成。乃ち補序を圓慈に托す。初め信州獨園老、癯基を修して後脫首座居る。延享中、夫龍舊趾を復し師（白隱）に開祖となることを請はんと欲し、果さずして化し百金の資を留む。石井玄徳、古郡平七、杉山總左衛門宿志を全せんと、三人命を裏けて力を盡して漸を以て而して成る焉。（中略）冬地觀居士圓慈をして七處の設利を奉じて無量に安置せしむ。同三年師（白隱）六十九歳。春二月無量の設利を拜し、甲府能成に赴く。

是によると無量寺の概要が記されているが、更に關係のことを書いて見る。

この無量寺の開山は白隱和尚となつており、中興開山は夫龍和尚となつてゐる。元來此の寺の處は、脫首座（超宗解脫首座）が庵を作つて居たもので、其趾を享けて夫龍和尚が一寺を建立することになつたものである。其の後援者は白隱門下の所謂比奈の三伯と云はるる人達で、即ち古郡兼道、石井玄徳、杉澤宗信で何れも同地方の有力者であつた。脫首座は白隱年譜には無量の脫首座と記されておるので、そこが同首座の住居であつたことが知らるるのである。白隱年譜享保五年（白隱三十六歳）の條を見ると

秋。清見の陽春和尚碧岩錄を講ず。師（白隱）一日會に預る。次の日、春、衆に語つて曰く、昨日松蔭（白隱のこと）座下に在り。幾んど提唱を勞すと。無量の脫首座之を聞いて意甚だ之を怪しむ。

とあるのがそれである。大觀和尚の年譜補註に、脫本と、信の獨園和尚に駿の天澤に侍す。後に無量、神護の二寺に隨ふ。園滅後法運開かず、二寺を師白隱に委す。師乃す中興す。

とあるにより知らるる人である。天澤とあるのは同地より五キロ程離れた處にある神谷の天澤寺のことで、こゝ

に獨園は住して居たのである。猶同譜に

享保十四年師（白隱）四十五歲。脫上座古郡兼道を伴ひ謁して曰く、此子道を求む、願くは一則の公案を與へよ。師曰く、何ぞ取與を論ぜん、正與麼の時全體現成と。脫曰く初心方便し玉へ。師便ち筆を把つて書して曰く、如何なるか是れ見聞覺知の性と。通禮受して去る。後一年にして省あり。偈を呈して曰く、

萬仞嶮崖屈倒の時。

鋤頭火を出して宇宙を燒く。

身灰燼と成つて四もを回看すれば。

阡陌依然として禾穗就る。

師便ち向上の鉗錘を與ふ。是れより脫、通、徳、信共に盟を結んで参訣す。是を比奈の一公三伯と云ふ。

とあり、又其翌十五年の條に

比奈邑、杉山氏の寡婦名は政。脫公の點發により参禪

尤も切なり。

とありて脱首座の概要を知り得るのである。此の脱首座のあとを享けて夫龍は無量寺を創建し、白隱を開山と仰いだのであるが、實は白隱は此の无量寺の創建と其の後の維持について、少なからぬ苦心と盡力をなすのである。それは自己が開山と云ふ關係もあるが、法弟たる夫龍が實際は創建の當事者であつたことでもあるので、夫龍歿

後は、東嶺和尚を無理矢理に此の寺に住せしめて、色々面倒を見るのである。

此の无量寺は前にも記した通り、明治の廢佛毀釋もあつて廢寺に歸し、若干のものは前記神谷の天澤寺に引繼がれたと云ふことである。今は其寺趾は畑地となり、同寺に緣故が有つた岡田家によつて支配されており、其屋後は山續きになつてゐる。其麓の小高い處に竹林があり、此竹林の中に彼の有名なる竹取物語にある香具耶姫の出した竹塚がある。其の隣續きに无量寺の元の墓基が當時の儘に残つており、そこに夫龍その他の數基の石塔がある。私は、秋山寛治氏と共に雨中に此の竹林の中に分け入り拜塔したのであるが、雨中の爲め寔眞がうまく撮せなかつた。其石塔は左の通りである。

无量寺前源立當寺中興快龍和尚

臨濟三十四世獨園利和尚禪師

正徳五乙未歲霜月朔冀

前任當院解脱首座

延享四年丁卯年正月十八日寂

この无量寺から少し計り距つた處に瀧川と云ふ部落が

ある。こゝに藤澤山妙善寺と云ふ妙心寺派の寺院がある。相州藤澤の遊行寺と元と縁故があり、照手姫に關しての傳説も残っている。此の寺は無量寺と近かき爲めに、白隠及び其他の門下のもも來遊したとのことだ。現在本堂正面の額は白隠の筆であり、遂翁の墨蹟等の遺品がある。この寺のメモによると、脱首座の寂後夫龍和尚が原より無量庵へ移り住む（延享元年）。寶曆二年比奈無量寺落成。白隠開山となる。同三年白隠無量寺の設利を拜すなどが記されている。

夫龍和尚と脱首座に關係ある獨園は無量寺と神護寺（同地にありしが如し）に住し、後に神谷の天澤寺の開山となつたもので、諱名を元利と云ひ、天澤の寺録によると信州上伊那郡中澤村養福寺の出身であつた。同寺に於ける其師慧忠和尚は静岡市臨濟寺鐵山和尚の五世の孫とのことである。こゝに注意すべきことは、此の當時獨園と稱する人が他に三人あつた。即ち至道無難下の獨園と、豊後月桂下の獨園と、白隠の法孫にあたる今一人の獨園がそれである。最後の獨園は信州温泉寺（或は慈雲寺）の出身にて松本惠光院（白隠受戒の寺、後に劫運和尚住す）及同地神宮寺に住し、何れも第十一世にて當時相當有名の人であつた。信濃高僧略傳集には、此の獨園を以て神谷天澤寺の獨園と混淆誤記されているで一言す

る。夫龍は無量寺の落成を見ずして示寂されたけれども、其基礎を築いたのであるから、中興開山となつており白隠が開山となつた事情は、荊叢毒藥にある無量禪寺草創記を讀めばよくわかるので左に抜抄する。

#### 無量禪寺草創記

寺を雲門と名づく。赫夜仙妃誕育の聖跡、彼の竹取の翁の居處山を神興と號す。淺間大士本迹不二。故との無量壽の舊基、人間の勝場、海内の靈地なり。昔し景行帝統行の日、篁中夜々光輝を放つを見る。彼の竹取翁截つて之を裂く。竹節の裏に箇の小仙女を得たり。爺嬢大に歡喜して親しく愛育す。天の作せる麗質祥光肌に滿つ。其の成大なるに及で見人癡心醉へるが如し。龍の領下誰れか一顆の珠を奪はん。高官人將さに軀命を損さんとす。燕巢裡豈に九穴の具有らんや。貴公子暗に兩眉を皺ばむ。天使遙かに來り窺ふ。且つ驚き且つ疑ふ。異香堂に滿ち天光屋を照らす。故に天子遙かに聞て棄置するに忍びず。大駕遠く海東萬里の嶮危を指す。爺嬢驚き恐れて以て患難と爲す。玉貌且らく舍北一處の石窟に隱る。俄かに綿實と鱸魚とを焼いて葬烟を近遠に揚ぐ。乍ち龍袖と錦衣とをして涙痕を丘岐に滴らしむ。妃久しからずして美容の空峒に入る。鄉民敬して淺間大士となす。翁は蒼鷹を愛し、嬢

は白狗を養ふ。故に今愛鷹、狗飼の二祠有り。年代深遠徒らに空しく口碑有るのみ。近頃土を掘て箇の白石塔を見る。傳へ言ふ此の地、中ごろ無量壽寺有り。應に是れ淺間大士が内祕の所爲なるべし。今又新たに新無量壽雲門庵と稱す。吾が黨は共に是れ紫野國師の後たるに因て、志願廣大にして力の乏しきを悲しむ。回復時至るも、争でかせん勢微なることを。元祿の初め獨園老、癡せるを前村に興し一把の茅を結ぶ。快龍師願つて舊趾に復して百金の資を留む。石井居士其の志を繼ぎ其の謀を定む。郡、杉二氏他の遺命に隨て能く其の力を盡くす。寶曆壬申佛生日、草廬纔かに成るを得て井竈竝び備ふ。雲門をして少しく門榛の儀を敷演せしむ。予乃ち合掌祝して曰く、皇基鞏固。佛日增輝。山門鎮靜。火災不興。次に冀くは後來此の山に住する者は、常に不退の願輪に鞭て奪命の神符を掛け、法窟の爪牙を磨して普ねく一切を利せんことを。今此の附托に堪へたる者は知んぬれ誰ぞ。東嶺庵主、諱は圓慈。

是によつて見れば開山は白隱、中興は夫龍、其あとを享けて東嶺が住したのである。斯くの如き因縁の深かき寺である爲め、白隱遷化に際し其の分骨を松蔭と龍澤と此の無量の三個所へ埋めたのである。

猶荊叢毒藥同卷に於て、其續きに神護山雲門無量壽寺佛舍利寶塔安置の記がある。其の大意は、京都高倉の世繼氏が如來眞身の舍利を得た爲め此の寺に納めた。而して舍利塔を建てたので、豆甲遠信駿の勝利として盛事の意義が有ると云ふのである。白隱は以上の二文を書いてゐるが、此の双方のことを東嶺和尚も同じ意味の文章を作つており、更に同寺の鐘銘をも作つてゐる。其文中には夫龍和尚が皆其基礎を造つたとのことが記されてゐる。是等のものは東嶺和尚の文集「退養雜毒海」に載つてゐる(白隱和尚全集第七卷)。猶此の地名については、駿州富士郡乘馬郷姫名村と記してゐるが、「比奈」と云ふ地名は「姫名」から轉じたものらしく考へられる。

又此の無量寺のことは、白隱和尚全集第六卷の白隱尺牘の中にも少しく散見してゐる。斯の如き白隱和尚と夫龍和尚との深かき間柄のものが一般より忘れ去られた原因の一つは、夫龍の死は白隱六十四歳の時のことであり、白隱の黄金時代はこれより遙か後の遂翁東嶺時代になつたからたので、更に其後の人々は其等のことに關心が薄すく、又一方に於ては遂翁東嶺などが名を成すに従ひ、遂に其の陰にかくされてしまつたものであらうか。例へば樹葉が生ひ茂つて、幽谷の蕙蘭が人目を惹かぬと同様であつたのかも知れない。然し乍ら東嶺和尚の撰し

た白隠年譜に白隠の法嗣として正確に書かれて居る者を看過して其存在さへ知らぬなどのことは、白隠の兒孫と稱する人々の怠慢と云ふよりは罪責と云つても過言ではないと考へる。宜ろしく此の埋もれ居る故人を認識顯揚すべきは勿論。直に白隠の法脈系譜圖を改訂すべきものと思ふ。

猶こゝに遺憾と思ふことは他の一人の法嗣者東巖元のことである。此の傳記については寡聞淺學全く手掛りがない。是も此の儘にして置くならば白隠傳は欠陥のままに後世に残るのである。高位の教を受けて更に東巖元の概略にても知りたいものである。

(昭和三十六年晩冬日稿)